コラム
「きのうきょう」

インド料理屋

文＆写真　学生記者　湊　和貴（総合政策学部４年）

中央大学多摩キャンパス近くに住んでいる私は、食事の際、自炊もするがヒルトップの学生食堂や周辺の飲食店を利用することもある。

入学後３年間で訪れた飲食店を数えてみると数多くある。そのなかでも３年生のときに初めて行った、ある店での出来事が印象に残っている。

学校からは少し遠い東京・豊島区の雑司ヶ谷。部活動の用事の前に時間があったのでインド料理店に寄ってみた。午後３時、店内はランチタイムを終え、客はほかにいなかった。

私は、学部でヒンディー語を学んでいたこともあり、授業で学んだフレーズを少し使ってみようと、日本語で席に案内されたときヒンディー語で「ありがとう」（シュクリヤ）と言ってみた。店員さんはとても驚き、同時に、うれしく思ってくれたようだ。その後はヒンディー語と、英語と、日本語とが混じった少し変な会話であったが、楽しく時間を過ごし、店内にあったＤＶＤをプレゼントしてくれた。その後も何度か通い、いまではたまに連絡を取り合う仲になった。

私は、外国語を話すことが嫌いではないが、得意なわけではない。得意な人であれば、どんどんいろいろな人に話しかけていき、こういう関係を築いていくことができると思う。ほんの何気ないことだと思う。

発音を間違えることによって相手に不快な思いをさせてしまうことや、相手に通じなかったときの不安感というのも少なからずあった。しかし、自分のつたない言語であってもたった一言の「ありがとう」がここまでの関係を築けたことは非常にうれしかったし、人のつながり方とは面白いものだと感じた。

英語にしても、ヒンディー語にしてもうまく話せたとは思っていない。が、それでも通じあえたのはヒンディー語で一言話すという相手へ寄り添う姿勢を見せたからだろう。

いまの私に海外へ渡航する計画はないが、機会があればそういう姿勢で人と接してみたいと思う。

ライスもいいが、やはりナンがベスト。熱々のナンは絶品